

桜蔭俳話会 四月句会 (第三二四回) 平成二十六年四月二十七日(日)

会場・旭区民文化センター(サンハート)

猫の恋シングル比率拡大す 明美

【鑑賞】

シングル比率とは、婚姻可能年齢人口に対する既婚者の割合を簡潔に表すためのマスコミ造語かもしれないが、言い得て妙である。少子化に連動するシングル比率増大は、日本の未来の社会構成に大きな影響を与えるファクターである。この人口減少の懸念問題と、個体数の増加を暗示させる猫の恋との突合せが、機智に富んでいる。

下五において、「拡大」という名詞に「する」という意味の「す」を付けて動詞化を行なっているが、このような処理の仕方は平叙文的な印象を与えるから、出来るだけ避けたい。「す」を消して、「拡大のシングル比率猫の恋」と変形することもできる。

酌み交はす羅漢の像や花吹雪 友子

【鑑賞】

広辞苑によれば、羅漢は阿羅漢の略で仏教修行の最高段階に達した人のこと。各地の寺院には典型的には五百羅漢として、様々な表情や仕草の羅漢像が置かれている。作者は花吹雪の散り込む羅漢の群像の中に、酒を酌み交わしているような仕草の羅漢を見付けた。花見酒を連想させることによって、人間臭い羅漢の存在を活写している。

目標に遠き歩数や山笑ふ 弘子

【鑑賞】

作者は春になったら一日にこれだけは歩こうと目標を定めたが、実際の歩数は目標に達していない。遠景にある春の山は、春の暖かい日を浴びているだけである。

季語の「山笑ふ」は、春の山の明るい感じをいう。擬人化された山があり、その山が笑っていると捉えるものではない。したがって、この句を読むとき、目標の歩数に到達しない作者をからかうように山が笑っていると、即物的に曲解してはならない。

目標の歩数に足らないから山が笑っていると思っではいけない。目標の歩数に遠く及ばないという事象と、春の山が笑うように明るく見えるという事象の間に因果の関係はない。その意味で、作者は「山笑ふ」という季語を正しく使っている。

ぺんぺん草どこで切らうか立話 弘子

【鑑賞】

ぺんぺん草は春の七草の一つである。これをかしこまって「花薺」と言うのではなく、ぺんぺん草と言ったことにより実感がよく出ている。道端や庭先をどこまでも蔓延って行くぺんぺん草と、延々と続く立ち話との突合せが良い。

パスポート更新迷ふ春深し

ツル子

【鑑賞】

加齢に伴う体力の減退を考えると、今回のパスポートの更新手続きをとるべきかどうか、年配者の悩むところである。

前向きに考えれば、「パスポートの更新終る春深し」ということになるのであろうか。

大仰な指の繃帯蛇いちご

秀一

【鑑賞】

繃帯が大袈裟なものであろうと、控え目なものであろうと、指の繃帯と蛇いちごとの配合は、何か暗示的である。

繃帯と蛇いちごだけで句ができるかも知れない。

花冷えや麻酔の解けぬ親知らず

ツル子

【鑑賞】

赤青く腫れた歯茎を通して打たれた麻酔注射の効果がまだ残り、親知らずの周囲のまだボワンとしている。この歯茎の色調と麻酔の残る感覚が、花冷の季語に相応している。幾つになっても、歯医者に行くのは嫌である。

山の湯の丸太のまくら花馬酔木

ヤエ子

【鑑賞】

山歩きの好きな作者ならではの一句である。「丸太のまくら」の把握が良い。浴槽の縁の丸太を枕にして山の湯に今日一日の疲れをとり、明日への英気を養っている作者の姿を彷彿とさせる。

花菖蒲女ばかりの昼会席

才美

【鑑賞】

この句の眼目は、「女ばかり」にある。子供を無事育てあげ、伴侶も健康で定年を迎えることができた主婦は、今それなりの自由を謳歌している。花見の名所や菖蒲園に行っても元気な女性の姿が目立つ。昼餉の店に入っても席は女性グループで一杯である。

俳句は伝統的に言えば、五七五の音律の中に季語を入れた有季定型詩である。上五の字余りは許されるが、中七や下五の字余りは、出来る限り避けた方が良い。この句では、下五が「昼会席」の六音になっている。「このような場合、実景とは少し離れているが、似た情景を描写する言葉を探して、下五を五音にしてリズムを整えた方が良い。たとえば、「花菖蒲女簿狩の茶懐石」と変形することもできる。

久に出で五臓六腑の緑かな

ツル子

【鑑賞】

久しぶりに出掛けたとき、緑の息吹の只中にいる自分を感じ、自然の中に生かされている恩寵を感じたので

あろう。「緑」が生命感にあふれた言葉として句に生かされている。「五臓六腑」という古風な表現が、一句に命の重さを与えている。偶然まったく別の句会で「五臓六腑」の言葉をみたが、五臓六腑は生身のからだ、命を象徴的に表す言葉として、上手い選択である。

「久に出で」の上五は、作者自身にとつてはまさしくそうであろうが、一句の構成としては、いささか誘導的ないしプロローグ的な修辞である。たとえば、「しみわたる五臓六腑の緑かな」とすることもできる。

十葉や家も晩年根が緩む

幸

【鑑賞】

十葉の生命力と、作者を含めた家の衰えを対比して詠んだものである。「家の根が緩む」との把握が良い。「十葉や家も晩年根太緩む」とすることもできる。

花いかだ雨に打たれて沈み行く

真壽

【鑑賞】

川の合流点や河口で波に煽られて花筏が転覆したり、沈むことは良く観察され、句に詠まれている。しかし、花筏が雨に打たれたただで沈んで行くことを発見したとのことは、寡聞にして初めてである。作者の着実な写生の賜物であろう。

うららかや電動で撞く時の鐘

友子

【添削】

鐘は撞いて音を出すものであるから、「鐘」に「撞く」という動詞を使うのは普通である。また、川越の時の鐘が電動式であることも良く知られていることであるから、「電動で撞く」という表現も俳句の世界では既に普通のことである。「うららかや電気仕掛けの時の鐘」と変形することもできるが、果たしてどうであろうか。

桜蕊ふる初めての気付きかな

直子

【鑑賞】

桜は、芽、蕾のころから人の注目を浴び、開花してその注目度は絶頂にのぼり、飛花落花するまで人に愛されるが、花びらを全て失った蕊に一般の人々が注目することは稀である。俳人であればこそ、その桜蕊に目をとめて句に詠む。「桜蕊初めての気付き」としたのは、作者が俳人の域に入ったことの証左であろう。しかも、「桜蕊降る」と正しい季語の使い方をしている。

花満開学校跡地の低鉄棒

ヤエ子

【添削】

下五に「低鉄棒」と置いた作者の気持ちは分かるが、言葉としては無理があり、発音が詰まっている。これらの問題を解決するには、言葉を整理して、「花満開鉄棒低き校地跡」とすることもできる。

落椿音に振り向く谷戸の道

幸

### 【添削】

落椿の句に「音」を配合することは、既に多用されているので、「音に振り向く」では普通の表現である。場所設定の「谷戸の道」の表現も普通である。そこで、「落椿振り向けば亡き人の影」と変形することもできる。

春筍の穂先小道へ侵入す

友子

### 【添削】

侵入の対象が「小道」では大袈裟すぎる。また、我が庭先や通路では陳腐である。そのため、「侵入の春筍の穂を踏まず行く」と変形することにした。

どこに侵入したかを特定せず、ただ、侵入して来たその穂先を大事にし、靴で踏まないで歩いて行くことにした。民法上の規定に従って、後で掘り取るために、あるいは、近所付き合いとして掘り取った筍を隣家と分けるために。

ふつくらと彩り淡し木の芽山

ヤエ子

### 【添削】

上五、中七は季語の説明である。木の芽山はまさにそのような感じである。季語に与えられた意味は、俳句の詠み手と読み手がその季語に抱く共通認識であるから、季語の意味をいくら簡潔にうまく表現しても、俳句とはならない。

単独の山歩きではなく、親しい同行者がいて簡単な会話を交わせる状況であったとすれば、「淡い」を活かして、「山行の淡き会話や木の芽山」と変形することもできる。

尚、「木の芽」と書いて「きのめ」と読むのは、その木が、木の首座にある「山椒の木」であるときだけである。山椒の木以外の木であるときは、「このめ」と読む。全山が山椒の木で覆われていることは通常ないから、普通「木の芽山」は「このめやま」と読む。

四十雀の規則正しき声のして

清子

### 【添削】

いつも規則正しく鳴く鳥の声が「規則正しい」と詠んでみても、常識の範囲内では読み手に訴えるものは少ない。そこで常識を離れて、「不規則な声を残して四十雀」のように変形すると、蛇に卵を狙われたかのように、読み手は四十雀の遭遇した異変をそこに感じ取ることができる。

競り仕舞ふ骨董市や若葉冷

才美

### 【鑑賞】

熱気を込めた骨董市の競りが終わったとき、作者はふと若葉冷えを感じた。「仕舞ふ」は四段活用動詞「仕舞ふ」の連体形である。

(不在投句 古野明美、原田清子)

「事務局からお知らせ」

○第一一三回通信句会作品募集

春に属する季語を用いた三句。締め切りは五月十日(土)。同封の葉書でお送り下さい。

○五月句会 (吟行となります)

・ 期日 五月二十五日(日)

・ 場所 鎌倉東慶寺、浄智寺方面

詳細は、同封の案内をご覧ください。

○六月句会

・ 六月二十一日(土) 午後一時

・ 場所 旭区民文化センター(相鉄線二俣川 駅ライフ五階)